清掃員は見た「コロナ禍のごみ捨て」酷すぎる光景　可燃ごみの中に瓶缶ごちゃ混ぜ、マスク放置

5/2 東洋経済藤井 誠一郎 ： 大東文化大学法学部准教授

カラスに荒らされて散乱したごみを集める様子（筆者撮影）

毎日、毎週、真夏や雨の日でもあたり前のように収集してくれるごみ。しかし、誰がいつどう収集していくといった現場の実際についてはほとんど知られていない。それらについて研究者として現場に立ち、調査をしているのが大東文化大学の藤井誠一郎准教授だ。藤井氏は、これまでさまざまな自治体で清掃作業を体験。現場の調査を続けている。

人員削減と新型コロナウイルス

皆さんの記憶にも新しいと思うが、2021 年 8 月中旬、東京都台東区の清掃事務所で新型コロナウイルスのクラスターが発生した。ごみ収集職員が発熱して検査を受けたところ陽性が確認された。その後、同じ事務所の 148 名に PCR 検査を実施した結果、合わせて 16 名の感染が判明した。

行政改革による人員削減により、どの清掃事務所でも余裕のない人数で業務を回しているが、新型コロナウイルスに感染して休務となる職員が出た際は、配置の工夫によりごみ収集のサービスの維持に努めてきた。

しかし、台東区のクラスターでは、16 名の感染者以外にも約 20 名の濃厚接触者や体調不良者も自宅待機となってしまい、通常のごみ収集体制が維持できない状況に陥った。

台東区は苦渋の決断により、不燃ごみの収集を 8 月 16 日から 31 日まで休止する対策をとり、残った清掃リソースを可燃ごみの収集に集中させた。不燃ごみは仮に出せなくても臭いをはじめとする衛生的な問題が生じにくいが、可燃ごみはそうはいかない。チラシをポスティングし、HP や SNS での情報発信により周知徹底したため、大混乱は生じず急場をしのいだ。

普段のごみ収集サービスは、東京 23 区であれば、清掃の拠点となる清掃事務所（各区が地区ごとに設けている）から提供される。清掃サービスを提供するうえでの要となる場所で

あり、そこには作業員や運転手といったヒト、清掃車等のモノ、収集業務に関するさまざまな情報が存在している。
仮にそこでクラスターが発生すると、清掃サービスは止まってしまう。最悪の場合、ごみが路上に放置される状況に陥り、ごみが腐敗して臭気が漂い、蛆（うじ）がわき、ネズミが行き交う状況へと陥る。
筆者が入った清掃現場で働く方はこのことを十分に理解し、自らが感染してサービスを止めてしまわぬように、感染防止に向けてかなりの努力を重ねていた。多くの清掃労働者は、こまめな手指の消毒やうがいを心がけ、昼休みは接触を可能な限り少なくし、業務終了後は同僚と飲食には行かず真っすぐに家に帰る、といった対策を取ってきた。そして、いつもどおりの清掃サービスを提供できるよう体調を整えてきたが、それでも、これだけ蔓延していると感染は完全には防げない。

清掃サービスの維持のためには何が必要か

現場での収集作業を通じて、私たち生活者が清掃サービスの提供を受け続けるためには、清掃労働者の感染リスクを可能な限り低減させていく必要があると感じた。その具体的な事例を紹介する。
私たちにできることは単純明快だ。それは、「自治体が定めたルールに基づいてごみを分別し、指定された曜日や時間や場所にごみ袋をしっかりと結んで鳥獣対策を施して排出する」である。
2020 年 4 月に緊急事態宣言が発出された際には、ごみ収集は危険を伴うと言われていた。しかし、これまでの実践が示すように、通常のごみ袋を清掃車に積み込む収集作業自体から感染するケースは見受けられない。
実際の収集作業をひもとき、どの部分に感染リスクが高まるかを考えると、それは紛れもなくイレギュラー対応においてである。このイレギュラー対応をなくせば清掃サービスは自ずと継続されていく。
筆者は緊急事態宣言下やまん延防止等重点措置となっている期間に、東京都北区、新宿区、神奈川県座間市で収集作業を体験した。先述のとおり清掃サービスの維持が社会的な課題となっているにもかかわらず、そこで直面したごみ排出の現実に落胆し、怒りを覚えた。
ほとんどのごみは、自治体のルールに基づきしっかりと分別され、指定された曜日や時間に排出されているのであるが、中にはそうでないごみも見受けられる。可燃ごみの収集の際には、必ずと言っていいほど袋の中に瓶、缶などの資源ごみが混入されているケースがある。
ごみをつかんだ瞬間に音がしたり妙な重たさを感じたりするのですぐにわかるのだが、それが確認できた場合には、ごみ袋の中から不燃物を取り出さざるをえない。なぜなら、それらを清掃車に積み込んでしまうと、清掃工場の焼却プラントを損傷する可能性があるからである。
その際はごみ袋を開封して不燃物を取り出すのだが、ごみ袋の中には使用済みのマスクやティッシュが入っているケースもある。感染者数の増加で自宅療養している人も多く、そこから排出されたごみである可能性も高いため、清掃労働者の感染リスクは自ずと高まっていく。
また、ごみ袋をしっかりと結んでいないため、収集作業でつかんだ瞬間にほどけてしまい、

ごみが辺りに散乱するケースもある。そうしたときには、手で直接ごみを触らぬように、清掃車に積んでいる「かき板」（ベニア板）を用いて集める。
清掃車を停めていると通行に支障が生じてしまう際には、なるべく早く作業を終える必要があるため、仕方なくじかに手でごみをかき集める場合もある。

ごみ袋から出たごみを手で拾い集める様子（筆者撮影）

ごみ袋から出たごみを手で拾い集める様子（筆者撮影）
さらには、しっかりと分別してごみを出しているのだが、カラス除けネットをしていないため、カラスに突かれてごみが散乱しているケースもある。風がきつい日はごみが付近に散乱し、異臭が漂い通行もはばかられることもある。この場合も同様に手でかき集めざるをえなくなる。

ペットボトル収集の困った出し方
一方、ペットボトルの収集では、飲み残しがあるにもかかわらずそれをそのまま排出している人もおり、収集時に清掃労働者に中身がかかってしまうこともある。先日ペットボトルの収集をしていたときに、ビニール袋を持ち上げて収集車のバケットに入れようとしたら、足に何か冷たい液体がかかったように感じた。よく見ると、ペットボトルから飲料がこぼれ、自らの服に付着していたのである。
また、最近よく見かけるのが、ごみの集積所に使用済みマスクを包まずそのまま置き去るケースである。風で飛ばされて、道端にぽつりと落ちているときもある。見つければマスクのひもの部分を持ちバケットに積み込んでいる。
新型コロナウイルスの感染者が出始め、緊急事態宣言が発出された 2020 年 4 月には、清掃労働者はエッセンシャルワーカーと呼ばれるようになった。文字どおり、社会において必要不可欠な働き手であるという位置づけなのであるが、言葉ばかりが先行しているようであり、それをいまだにしっかりと認識していないごみの排出者が後を絶たないのが現実で

ある。
ごみの向こうには、そこで働いている人たちがいる。清掃労働者も努力して清掃サービスの維持に尽力しているが、サービスの受け手であるわれわれも、自らの行為が清掃サービスの停止につながる可能性があること、それが自分へとはね返ってきて不便を強いられるようになることを理解する必要がある。
繰り返しになるが、それは難しいことではなく、自治体の指定のとおりに分別し排出する、たったそれだけのことなのだ。